

いったように市民がいて、行政があって、大学の研究者がいて、社会のエリートがいてと、いろんな人の危機対応能力があると思うのですが、市民が一番低ければ、市民のレベルに合わせざるを得ないわけなのです。そういうそれぞれのエレメントの、社会構成員の危機対応能力というのは、絶対必要というレベルまで高めておく必要があると思うのです。研究者プランナーについて言いたいのは、地域の優れた研究者は必ず安全を前提に研究をやってくれと。だから必ず阪神圏の大学の先生でリーダーシップをとる人は安全を基盤にしてほしいと。防災研究者というのは必要なんだけど、普通の実験者の方がいざという時は防災研究者より能力を発揮できるね。だから、ごく普通の一般的な研究やっている人が必ず地域に1人いて、その人が自覚を持って、その地域の安全ということを常日頃考えて行動するような自己シミュレーションしてほしいと思います。災害の公式というのは、災害はどうしてもないものと努力次第でどうにかなるものの加算の上に成り立っているということですね。それと新しい危機の能力を蓄えてほしいということで、今まで出てきてない問題として水の問題だとか、温暖化の問題だとかね。特に東京都心の温暖化の問題が進むと。マラリアが発生するとの噂もあるから、新しい危機を予知する能力あるいはそういう研究機関が必要だと思います。そして危機においてはタイミングが非常に大事ということ。同じ手をうつのか、Aという手をうつのかBという手をうつのか、それともBをうってAをうつのかで、全然効果が違うわけで、3・3・3の原則を出しているわけなのです。災害の時大きな災害だと3時間、3日間、3週間。3時間というのは被害を最小限に限定して3日間というのは被害を抑えて、事態の進行を見て、人命救助が大体3日目で終わってしまうから、次の手を考えて3週間までに立案しようという類のことなのです。最後に海外の事例にもっと関心を持ってということです。我々も目で見て、こういうことだったのかということがわかるわけで、頭の中の想像とはほとんど自分の身にならないですね。例えばBBCをずっと見てみると、IRAの問題で南米に基地があるだとか、犯罪というのはアルカイダにしろ世界ネットワークですよ。フィリピンでもアルカイダが関係するテロが起こっているわけで、それと日本もそんなに距離が離れてないわけですよ。海外でのいろいろ起こりつつある安全災害の事例だとか、それから対応策の事例について、明日の日本で起こるかもしれないという実感を持って見ることが大事だと思う。最後は笑い話だけど西山の本を読めと(笑)。本当にさっき言った自治体の首長や幹部、そういう人達が集まった時には無償で講演やっていますのですよ。だからいろんな海外の事例で多様な安全の対応があると、災害はいろいろ起こりますと。それから今起こらなくても、この先起こりますと。そういう想像力をたくましくするという事が最も大事ではないでしょうか。以上です。

谷 ありがとうございます。

西山 最後にね、僕のことをなんかの専門化と言ったけど。

谷 都市の危機管理の専門家。

西山 専門家じゃないな～。ある人からこういうこと言われたことがあって。防災学者というのは常日頃からそんな恵まれた、はっぴがないと言うわけ。マイノリティグループだし、災害が起こらなければ、研究費が出るのじゃないから。ただ、彼らは防災の方をやっているから研究費でてると思うのだよな。だからあなたのような新参加者が、さっと入っていろいろ成果をあげるのには、昔からやっている人たちに対して充分配慮しなければならないと。僕としては防災研究者になったわけではなくて、危機管理の都市計画というある分野をしたてようとはしましたけど。だからそれも考えてみると、日本の都市計画の本当の宿命であるとしたら、日本の都市計画論を理論化しようという一般的な都市研究者が絶対に開発すべき領域だと。危機管理の都市計画だけを専門にやっているわけではなくて、僕の専門は都市計画の中に大きく都市計画を位置づけて、そのプラットフォームの上で皆さんがより豊かな生活を考えていけば、その基盤づくりに対する問題提議であったというのが私の一番の狙いですね。

谷 私も、防災研究している人の領域を侵そうという気は全くなくてですね、どちらかというと私は災害よりも犯罪とかテロとか人為的な方に重きを置いてこれをやっていきたくて思っているのです。そっちが全然できていない。先ほど住宅の造り方が根本的に間違っていて、住宅地そのものも間違っていると。それから歩くまちづくりと言いながら、その視点が全く欠けていて、バリアフリーが逆に危険にしていると。ちょっと自慢話をしますと、テロでワールド・トレード・センターに突っ込んだのは、ある意味で予測していたのですよ。確か日航機か何かがハイジャックされて、機長を殺したという事件ありましたよね。あの時、機長が勇気を持って犯人を説得しようと操縦室に入れたのですよね。あれは絶対間違いだというのは、例え犯人が乗客全員殺しても400人ぐらいで、もし飛行機がとんでもないところに落ちたら

何万人っていう人が死ぬのだから、その時そういうことが犯罪として成り立つと直感的に思ったのですよ。だから密室なのだから絶対入れないという仕組みを作るべきだと。

西山 あなたが言っているのはある事態が起きた時にどれだけ想像力を働かして、最悪の事態を想像できるかと、その最悪の事態の場合にはビルに突っ込むこともあるだろうし、非常に超高密空間の中に飛行機が不時着して被害が広がるとか、いろんなことがありますよね。

谷 先生も私も向こうで生活した経験があるから、危機予知能力というのは高まっていると思うのですね。それともう1つは子供の時の体験がいろいろあって、かなり転勤族だったので新しいところ行くといじめられるのですね。たまたま母親が結核でいないときがあって、かなり1人で身を守らなきゃいけないという経験をしていましたものですから、今打たれ強いのですけど、そういうことで危機予知能力があるので、町なんかでは危機予知能力を元にして造るという方向に変えたいと思ってやっていますので、また、ご指導を宜しくお願いします。

西山 欧米なんかではディフェンシブルスペースとかいろんな本でてるけど、ちょっと日本では違うような感じがしますね。

谷 ありがとうございます。